

第1問 (200点)

【出題意図】

問題文は、望月優大『ふたつの日本——「移民国家」の建前と現実』(講談社現代新書, 2019年)の終章「ふたつの日本」からの抜粋である。本書は、とくに「平成」の30年間に、日本で生活する外国人が急増し、すでに総人口の2%を超えている現実を踏まえて、「遅れてきた移民国家」としての日本の実像を、技能実習生や不法滞在者など、不安定な立場に置かれた外国人の現実からあぶり出す一書である。

本書後半の議論では、2019年4月から施行された「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」にもとづく「特定技能」という外国人の在留資格をめぐる問題も論じられている。問題文として取り上げた終章では、永住か有期かという在留資格の区別が、正規か非正規かという雇用形態の区別との類比で検討され、「撤退」という言葉で特徴づけられる現代の世界的な社会変動のなかに位置づけられている。

本問題はまず、この「撤退」によって不安定な立場に追い込まれることは、外国人だけでなく、日本人の問題でもあることを指摘し、人権を享受できるための「支え」を、社会全体で整える必要性を訴える議論を読み解く能力を問うている。加えて、現代の日本社会、ひいては地域社会が抱える課題に関心を持ち、その問題解決に取り組む意欲、さらには自分の考えを論理的に表現し、まとめる能力も問うている。

問1 (30点)

【出題意図】

外国人の有期の在留資格と、労働者の非正規雇用を類比的に捉え、両者の立場の不安定性こそ、現代の日本社会が解決すべき問題であることを提起する筆者の基本的な視点を読み取る、基礎的な読解力を問う。

【解答例】

両者とも、期限がきた際に関係を継続する裁量を持つのは国家や企業の側で、国内に滞在し続けたり、会社で働き続けたりすることに関して個人には自由がなく、そのために不安定な立場に置かれるという点で似ている。(99字)

問2 (50点)

【出題意図】

問題文のキーワードである「大いなる撤退」という言葉の意味を、文脈から正しく理解する基礎的な能力に加え、現代日本社会における「撤退」の現れを、筆者がどのように捉えているかを読み取る読解力を問う。

【解答例】

国家と企業が非正規雇用の労働者を増やす一方で、有期の在留資格しか持たず、不安定な立場にある外国人を輸入するというように、日本人への関与を徐々に打ち切りながら、深く関与するつもりのない外国人を取り替え可能な労働力として導入することによって、個人の生の安定を保障するための負担からは自己を解放すること。(149字)

問3 (20点)

【出題意図】

「大いなる撤退」とともに問題文のキーワードをなす「周縁化」の語の意味を、文脈から正しく理解する基礎的な能力とともに、それが日本社会にどのように当てはめられているかを読み取る読解力を問う。

【解答例】

日本社会に生きるための最低限の支えすら与えられないまま、最底辺の労働者として働かされること。(46字)

問4 (100点)

【出題意図】

まず、国家と企業が個人の生の安定の保障から撤退することで、不安定な立場に置かれることが、外国人と日本人双方の問題であることを指摘する視点とともに、人権を実質的に享受できる基盤を、両者の連帯の下で整える包摂的な社会を目指すべき、という筆者の基本的な主張を要約する読解力と表現力が問われる。また、それを通じて日本社会、ひいては地域社会の課題を見いだし、筆者の問題提起に応えるかたちで、これらについての自らの考えを論理的に表現する能力、さらには社会の課題に取り組む意欲も問われる。

【解答例】 ※省略

第2問 (200点)

【出題意図】

問題文は、阿部彩の「女性の貧困はなぜ問題にされないのか」(『世界思想』46号, 2019年4月)の全文である。著者の阿部彩は、バブル崩壊後の日本において深刻化の度合を増しつつある格差・貧困問題について社会政策論の立場から提言を続けている研究者である。

「女性の貧困」に焦点をあてた問題文では、まず国民生活基礎調査のデータ分析にもとづき、近年の日本社会における女性の相対的貧困率の増加という隠れた事実の存在を明らかにしている。

その上で、女性の貧困問題を「少子化問題」に結びつけて捉えようとする現代日本の社会的風潮を浮き彫りにし、その背景として「女性＝子どもを産む性」と捉えるジェンダー・バイアスの影響があることを指摘している。そうした日本社会の現状を踏まえた上で、近い将来さらに深刻化が予想される「高齢女性」の貧困問題について早急な対策の必要性を訴える文章である。

本問題は、そうした「女性の貧困問題」をめぐる筆者の見解について、基礎的なデータの把握も含め、どこまで正確に論旨を理解できているのか、総合的な文章読解力を問うものである。その上で「女性の貧困」という、日本社会の抱えている今日的な課題に関心を持ち、受験生一人ひとりが自らの状況に引きつけて問題を捉えなおし、課題克服に向けて真摯に取り組もうとする意欲を示すことができているのか、各人の社会に向き合う姿勢が問われる問題でもある。

問1 (5点×4)

【出題意図】

「女性の貧困」をめぐる筆者の主張の出発点となる統計データの解釈について、問題文に記述されている内容を正確に理解した上で、論点を的確に整理し、まとめることができているか、基礎的な文章読解力と論理的思考力が問われる。

【解答例】

- ① 貧困率は男女とも減少している。
- ② 貧困率の減少幅は女性の方が小さい。
- ③ 貧困率は男性に比べて、女性の方が高い。
- ④ 貧困率の男女格差は拡大した。

問2 (20点)

【出題意図】

「相対的貧困」という概念を包括的に理解する上で必要となる二つの側面、すなわち生活の質という面と所得レベルでの数値的側面とをバランスよく組み合わせて説明できているかどうか、文章読解力と表現力、さらには貧困問題をめぐる現代日本社会についての基礎的な知識が問われている。

【解答例】

その社会・その時代において最低限の生活を送るための費用を賄えない状況にある人の割合。所得で言うと、社会全体の中央値のさらに半分以下の世帯所得の人の割合を指す。(79字)

問3 (40点)

【出題意図】

「貧困女子」という言葉によって含意される女性に対する社会認識のあり方と、それがもたらす「女性の貧困問題」への影響について、筆者の論旨を踏まえながら正確に理解することができ

ているか、適切な表現を用いて説得力のある文章にまとめることができているか、文章の読解力、構成力、表現力が総合的に問われている。

【解答例】

「女性の貧困問題」は本来、その社会において生活できるかどうかを基準に、中年・高齢の女性も含めて認識すべき問題である。しかし、「貧困女子」という言葉の下では、若い女性が貧困となることによって子どもを産めなくなり、将来的な少子化につながる、という少子化問題のロジックで貧困問題が語られてしまう。それにより、女性がひとりの国民・人間としてではなく、「子どもを産む性」として扱われているように見えるから。(198字)

問4 (20点)

【出題意図】

本問の解答を正確に導き出すには、問題文全体の通奏低音をなす「女性の貧困問題」の背後に潜むジェンダー・バイアスの影響というテーマを大局的に把握した上で、直前の段落・文章の内容を精査するという二段階の作業が求められる。このような読解を踏まえて、筆者が特に注目している社会問題を端的に言い表す能力が問われる。

【解答例】

中年・高齢期の女性の貧困問題 (14字)

問5 (100点)

【出題意図】

本問では、問1から問4でまとめた「女性の貧困問題」をめぐる現状について、問題文の論点を正確に理解した上で、対応のあり方を自ら考える力を問う。各人の提言が整合性のある論理として構成されているか、さらに的確な表現を用いて説得力のある文章にまとめられているか、問題文の読解力、文章表現力、受験生個々の発想力、さらには日常的な社会問題への関心が総合的に問われている。また問題文で提起された現代日本社会の抱える課題について、受験生一人ひとりが自らの状況に引きつけて捉えなおし、その課題の克服に向けて真摯に取り組もうとする意欲を示すことができているか、各人の実社会に向き合う姿勢も同時に問われている。

【解答例】 ※省略